

# 吉田松陰に関する研究文献

吉村忠幸

吉田松陰に関する文献一覧は昭和九〇一年の岩波書店版の吉田松

のである。

松陰自身の著述については次のように文久時代から松下村塾蔵版として出ている。これらはいづれも右記の岩波版松陰全集に収録されている。参考までに書名・出版年・特に編輯者名の出ているものはそれを加える。

孫子評註全二（文久3）、縛吾集・涙松集（合巻）（慶応元）、照顏錄・坐獄日録（合冊）（慶応元）、幽囚録全二（慶応4）、俗簡襍誌（慶応4、久坂義助輯）、宋元明鑑紀奉使抄（全二）（慶応4）、東北遊日記（慶応4）、鴻鵠志（明2）、留魂錄（明2）、松陰先生遺唖（明2）、講孟割記（全三）（明治2）、左氏兵戦抄（明2）、猛省錄（明治2か）、外蕃通略（明治2か）松陰先生手翰（明治2か）、読餘隨筆（明治2か、馬島光昭輯）、吉田松陰先生評清狂詩鈔（明治2）、己未東行前日記（明治3）、史記前後漢書明倫抄（明治3）、幽室隨筆（明治3、馬島光昭編）

文久・慶応・明治の時代は松陰に關係した人々が存命であったから、その遺文の収録と出版が中心であった。時代が進むにつれて、遺文の集大成が進み、次第に遺文を用いての著述が出版されている。出版された著述の傾向によつて、松陰がどのように利用されたかがわかるし、松陰の思想も明らかになっていった。さらに吉田松陰の行つた教育についての文献も僅かずつだがふえていく姿も明らかになる。

私は山口の県立図書館、萩の県立図書館、国立国会図書館にその研究文献をしらべてみた。山口をY、萩をH、国会図書館をKとして、その存在を示すようにした。教育に関するものに当るのが主であったので、それらにY・H・Kの記号で存在を示したが、一般文献については、たまたま知りえたものだけ、その所在を示した。また戦後の出版物については、山口及び萩で知りえたものにはそれぞれ所在を示した。無記入のものは私自身の所有のものかまたは一般に入手可能なも

書名	編著者名	出版社・登載誌	出版年	所在	全集・註
仮名挿入皇朝名臣伝 五	中沢寛一郎編	溝口嘉助	明13	二三五、註1	
講孟劄記 全五	文求堂	文求堂	明14	二二九	
儲穀話	博古堂	博古堂	明14	四一、四二四、註2	
幽室文稿 全六	尊攘堂藏版	尊攘堂藏版	明14	三三一	
松陰詩集 全一	大蔵省印刷局	大蔵省印刷局	明16	五及六	
嘉永癸丑吉田松陰遊歴日録	品川弥二郎校・吉田庫三編	品川弥二郎校・吉田庫三編	明17	七三五、七三三	
回顧録 附長崎紀行 全一	吉田庫三校	吉田庫三校	明19	七三五	
吉田松陰回顧録	維新資料二六	維新資料二六	明21	七三五	
吉田松陰廿七夜記	維新資料七	維新資料七	明21	七三五	
象山・松陰事蹟(眞田家調書)	維新資料二十三	維新資料二十三	明21	七三三	
象山松陰慨世余聞	斎藤丁治編	斎藤丁治編	明22	七三五	
二十一回士吉田松陰先生の漫言	的学人	的学人	明22	七三五	
松陰神社頌繁余事	吉田庫三	吉田庫三	明23	七三五	
幽囚録	吉田庫三編	吉田庫三編	明23	七三五	
吉田松陰伝	野口勝一共著	野口勝一共著	明24	七三五	
農書	富岡政信	富岡政信	明24	七三五	
吉田松陰先生遺文	野史台	野史台	明24	七三五	
東北游日記	文求堂	文求堂	明25	七三五	
吉田松陰	猶興社	猶興社	明25	七三五	
吉田松陰	「国民の友」二四五卷	「国民の友」二四五卷	明26	七三五	
Y	H		明26	七三五	
註4	一五九	註3	明25	七三五	
	二二三		明24	七三五	
	二二三		明24	七三五	
	二二三		明25	七三五	
	二二三		明26	七三五	

註1、この欄で(二二三)などと示すものは、前記吉田松陰全集所収の巻と頁である。

註2、本編は品川弥二郎の編で、戊午幽室文稿と己未幽室文稿の二つを収めている。

註3、本書は松陰の伝記としてまとまつた最も古いものであろう。大冊本で、

著者の肩書きに「茨城県土族」とある。松陰の肖像、毛利元徳の書、伊藤博文・山縣有朋・山田顕義らの書をのせて、品川弥二郎が漢文で序文を寄せている。

野村靖・林友幸・楫取素彦らの文もある。松陰の遺文を編年体にして入れてある。重厚なもので、解釈はのせていない。これが普及の基になったものと考えられる。

註4、徳富蘇峰の意図では松陰の正伝を書くことよりも別のことについた。そ

の序文にいふ。「題して吉田松陰といふも、その実は松陰を中心としてその前後の大勢、暗潜黙移の現象を観察したるに過ぎず、若し名実相副はずとせば、或は

改めて『維新革命前史編』とするも不可ならむ」と。少くとも明治二十六年頃までは吉田松陰正伝ともいふべきものではなかつたということができよう。

書名(所収)	編著者名	出版社・登載誌	出版年	所在	全集・註
日本百傑伝 第十二編 外蕃通略 俗簡裸轉	松井広吉編 吉田庫三校 久坂義助編・品川弥二郎校	博文社 尊攘堂版	明28	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰の苦学 (名家談叢一) 吉田松陰文 (少年伝記叢書)	吉田庫三校 山田徳明	吉田庫三校 山田徳明	明28	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰先生文稿 全二	国木田独歩編	吉田庫三校 山田徳明	明27	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰先生の性行 (名家談叢二一) 吉田松陰先生の対韓策 (名家談叢二一)	品川弥二郎 武陽生	天野御民編述	明26	八三七、註5 玉巻	
松下村塾零話	吉田庫三	山口桂梅吉	明20か	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰君の行実		史談会速記録	明20か	八三七、註5 玉巻	
松陰先生批評東坡策	品川弥二郎 台麓道士	村塾藏版	明20か	八三七、註5 玉巻	
象山と松陰	品川弥二郎 干河岸貫一	博文館	明20か	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰埋葬及改葬の記	岡部精一 千河岸桜所	太陽	明20か	八三七、註5 玉巻	
近世百傑伝	吉田庫三	日本人	明20か	八三七、註5 玉巻	
二十一回猛士吉田松陰	水野嘉一郎 桂山生	博文館	明20か	八三七、註5 玉巻	
松下村塾	石村平川 野村靖	武士時代	明20か	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰及び頼三樹三郎の死際	東西一 金港堂	史学界	明20か	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰入海失敗顛末	相沢敏太郎 東西一	日本人	明20か	八三七、註5 玉巻	
松陰先生逸事一節	井上哲次郎 藤村	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰逸事 (スバルデング氏日本遠征記抄録)	水野嘉一郎 桂山生	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰 (教育研究会講演集第三輯)	石村平川 野村靖	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
山鹿素行と吉田松陰	東西一 金港堂	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
新年と吉田松陰	相沢敏太郎 東西一	東亜の光	明20か	八三七、註5 玉巻	
松陰翁小伝	井上哲次郎 藤村	日本及日本人	明20か	八三七、註5 玉巻	
松下村塾を観て感あり	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
吉田松陰物語	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
徳富猪一郎	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
井上哲次郎	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
斎藤保郎編	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
水野嘉一郎	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
桂山生	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
石村平川	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
野村靖	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
東西一	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
金港堂	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
東亜の光	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	
日本及日本人	同上	明20か	明20か	八三七、註5 玉巻	

H

Y

•

H

八三七  
玉巻八三七  
玉巻八三七  
玉巻

註8

註7



吉田松陰に関する彼理遠征記	吉沢滋	斯民 三八
松陰雑纂	八太徳三郎	政教社
松陰先生女訓	吉田庫三編	民友社
孫子評註	吉田松陰	水交社
青年鑑 第二編 松陰編	吉田松陰	元々堂
吉田松陰	吉田松陰	隆文堂
吉田松陰	吉田松陰	弘道館
吉田松陰	吉田松陰	二岡書房
吉田松陰 精神修養談	吉田松陰	杉原三省
吉田松陰 護送を目撃せる人の懐旧談	吉田松陰	森露華
吉田松陰 (碧瑠璃園叢書第一巻)	吉田松陰	帝国教育会編
武教講録 全二	武教講録	豆理草三郎
武教講録	鳴呼松陰	斎藤謙
吉田松陰五十年祭偉人の跡	吉田松陰	帝国教育会
吉田松陰 (偉人言行録)	吉田松陰	教育会
松陰先生教訓道話	正氣歌講義 (文天祥・東湖・松陰)	防長教育 一〇
吉田松陰と神道	岡部精一	大学館
野口復堂	渡辺霞亭	梁江堂書店
三宅雄二郎	根本正	乃木家藏版
杉原夷山	渡辺霞亭	水交社版
佐藤春葉	明 42	丙午出版社
楨不二夫	明 42	三芳屋松陽堂
岡部精一	明 42	大盛堂書店
神社協会雑誌 一〇四	如山堂書店	如山堂書店
明 44	明 44	春陽堂
明 43	明 43	明 43
明 43	明 43	明 43
明 43	明 43	明 43
明 43	明 42	明 42
明 42	明 42	明 42
明 42	明 42	明 42
明 41	明 41	明 41
明 41	明 41	明 41
Y Y	Y	Y H Y Y
三九一 と同じか	註 15	四三六
などがある。乃木希典が「松陰の薰化」として教育を語っている。内容として特記すべきものはないが。	註 14	

註 11、著者の天野御民は安政四年十七才で村塾に入門し、教をうけた冷泉雅二郎である。後、天野家に養子となつた。王事に奔走し、明治になつて司法官になつた。晩年隠退し、この著を作る。「松陰先生の松下村塾における事ともを記述せんと思ひ立ちしが、奈如せん、予か先生に従学したるは僅かに一年有餘のみ。加え予はこの時年甫で十七八にして何事も意に留めず且先生歿後すでに四十年、見聞したることも多くは遺亡したり」「本篇載する所惣て順序次第なし。唯思ひ出るに随て之を書き列ねたるものなり」(一〇三六)で而も短いものであるが、實に近いものであろう。

註 12、所収の題目と筆者をあげると  
野村靖、吉田松陰先生の神體  
乃木希典、吉田松陰先生の薰化  
中原邦平、吉田松陰先生の事蹟について  
杉浦重剛、松陰四十年  
河東碧梧桐、松陰神社

などがある。乃木希典が「松陰の薰化」として教育を語っている。内容として特記すべきものはないが。

註 14

註13・14、吉田庫三の「松陰先生遺著」はこれまでの松陰の遺文の集大成である。八太の松陰雑纂と同様である。明治四十一年は一九〇八年、安政六年即松陰の刑死から数えて百年目に当る。明治四十二年に徳富蘇峰の吉田松陰は十版を重ねてある。四十一年から四十三年にかけて伝記も数種出版されている。これは杉原三省の「精神修養談」にあるごとく、精神修養や教訓道話に松陰が利用され始めていたことを示すものである。

註15、渡辺の著の吉田松陰は当時としては大衆向きのものであったが、原文そのまま入れ、かつ遺文をその附録につけていた。現代からみると非常に程度の高いものであった。大正六年にはその縮刷版が出、大正九年には十六版を数える程であった。

書名(所収)	編著者名	出版社・登載誌	出版年	所在	全集・註
松陰「七生説」註解 山鹿素行と吉田松陰の生死観	中島靖九郎 堀江秀雄 斎藤鹿三郎 岡部精一 横山健堂 長谷川芝之助 遠山操編	神社協会雑誌二八 国学院雑誌二六、五一 第一公論社 仁友社 金港堂 政教社 厚生堂 東亞堂書房 赤心社書店 博文館	大1 大1~2		
吉田松陰言行録 吉田寅次郎(偉人叢書九)	伊藤痴遊 金原善三郎 武田鶯塘 松浦重剛・世木鹿吉	東亞堂書房 赤心社書店 博文館	大2		
吉田松陰修養訓 吉田松陰の遺墨(史談史話) 教育勅語と士規七則 松陰先生と精神修養	足立栗園 重田定一 萩中学校 同上 弘道館 富田文陽堂 山口県美弥郡教育会	東亞堂 博文館 富田文陽堂 弘道館 同上 山口県美弥郡教育会	大2		
吉田松陰(改訂版) 松陰神社温故録 吉田松陰遺文東征稿 吉田松陰	村上俊江 徳富蘇峰 萩中学校校友会 島田増平 安元彦助 平凡社 修養文庫刊行会 大日本明道会 富山房	島田増平 徳富蘇峰 萩中学校校友会 島田増平 安元彦助 平凡社 修養文庫刊行会 大日本明道会 富山房	大2	註16	
回顧録・留魂録(賢聖伝下) 幽囚録(勤王文庫一) 近世の日本(吉田松陰)			Y Y Y H H H Y Y		
					註17 一五九、一七〇 一七一、一七二

吉田松陰渡米の計画 上・中・下	吉田松陰号	松陰先生記念号	吉田松陰	吉田松陰と俳句	驚天動地、松陰と左内	幕末の大和五条と勤王志士	吉田松陰と左内							
-----------------	-------	---------	------	---------	------------	--------------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------

阿部美親	歴史と地理 四六、五一、六四	防長教育時報	日本太郎 三一六（萩）	下村書房	懸葵 一八四	田村吉永	高橋淡水	木村卯之	武田鶯塘	大久保四州	内田銀藏	大町桂月	高橋淡水	内田銀藏	大久保四州
------	----------------	--------	-------------	------	--------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	-------

歴史と地理 九二、三	改造 六六	東洋思想研究所 第十九冊	同文館	邦光堂	日本青年館	中里介山	高田盛穂	大庭柯公	横山健堂	阿武郡教育会編	吉田松陰（柯公全集五）	吉田松陰と國土的陶冶	獄裡の松陰	吉田松陰とその門下	吉田松陰の海防論
------------	-------	--------------	-----	-----	-------	------	------	------	------	---------	-------------	------------	-------	-----------	----------

大8~9	昭3 昭3 昭3 昭3 昭2 大15 大15 大15 大15 大15 大15 大15 大14 大14 大14 大14 大14 大13 大13 大11 大10 大10 大9 大9 大9 大9														
------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

Y H H	Y	Y	Y Y
-------	---	---	-----

註22	註21	註20	註19 註18
-----	-----	-----	---------

少年吉田松陰伝  
維新史における吉田松陰先生の地位  
松陰先生遺墨展覧会目録

松本浩記  
徳富猪一郎  
青山会館

大同館書店  
尊攘堂記念講演

昭 3  
昭 3  
Y H

註16、第十章に「松下村塾の教育」として、次のように項をあげている。

- 第一 実家屏居
  - 第二 松下村塾の綱領及び其の教育法
  - 第三 松陰先生の武士道講義
  - 第四 松陰先生と門人諸友との間の至極の愛敬
  - 第五 松陰先生の主義主張及び其の実行方案
  - 第六 松下村塾にて教授した書籍
  - 第七 松下村塾隨筆
  - 第八 松陰先生の教育法の真髓
  - 第九 再度の投獄命令に就ての覚悟
  - 第十 松陰先生と小田村士毅（楫取素彦男）との関係
  - 第十一 松陰先生と其手紙
  - 第十二 松陰先生の徹底的感化
- これらの区分により二十六才から二十九才までを伝記としてとらえていることは特筆できる。

註17、蘇峰の吉田松陰伝は当時の松陰觀をもつともよく表現している。先に明治二十六年の初版については註4で、明治四十一年の改訂版の例言については註10で説明したが、大正六年にも「吉田松陰」を補正し、その序文にいう。

「松陰先生は未成品なり（中略）松陰先生は自ら完人を以て任せず、彼は最も大胆にその過誤欠点を意識し自己暴露したる快男子なり。（中略）而して我が大正時代の社会に必須とする人物は形似たる松陰にあらず、精靈的松陰なり。即ちその学ぶ可きは彼の言行の末にあらずしてその眞骨頭にあり。その大本領にあり。その至誠欺かず己を捨て、君國に殉する大節情操にあり」と。  
註18、防長教育時報があるので教育面にふれてみると考えられるが、見ることができなかつた。

註20、序文のなかに「教育家としての松陰先生を見ることに注意を払った」とあり、文献も引用しているが、松陰を講談的に解説しているもので、松陰の教育を分析しているものではない。

註21、この一編は「幕末明治人物史論」に収められているもので、これまでの世論をもとにまとめられたものといえる。そして松陰の教育を要約して次のように述べている。

「徹頭徹尾松陰は適人教育と感情教育を本として、門地に捉はれず全く形式を去つて実質に従ひ、子弟を導き門生を教へ、人物を養成するに努めたために、当時の門閥教育の缺陷を補ひ、偉才俊才を輩出せしめ得たのである。時期はわずかに二年有半、場所は陋隘なる小屋であるに拘らず、松下村塾が教育の効果を收むこと甚だ多かかったのは教育する精神に非常に卓越したものがあつたからである。即ち熱心と至誠と愛慈と並らび行われて、以て能く薫育を行つたためであると思はれる」と。

註22、昭和3年は松陰の死した安政六年から数えて七〇周年に当る一九二八年である。萩の松陰神社がこの年始めて小冊子を出したのであるが、萩の松陰神社は現在の杉家の庭前に小さな土蔵を作つて松陰を祀つたのから始まり、それは明治二十三年で、この年は三十八年目に当つている。（五六五）さらに明治四十年に規模を拡大し現地に県社として改修された。明治四十年は一八五九年で刑死後丁度五十年目に当つている。







吉田松陰（春秋文庫）	玖村敏雄	春秋社
吉田松陰教育説選集（日本教育文庫五）	武田勘治編	第一出版協会
吉田松陰先生伝教観察	稷田雪崖	同上
吉田松陰の国体觀（尚志教育叢書一〇）	玖村敏雄	廣島文理科大学尚志会
吉田松陰の至誠論（日本精神研究一〇）	廣瀬豊	東洋書院
吉田松陰の留魂錄（日本精神叢書一）	紀平正美	日本文化協会
吉田松陰論語	大嶺豊彦	教材社
吉田松陰	小川五郎	山口県教育四七
吉木田独歩と吉田松陰	中野光治	春秋社
吉田松陰	吉田理	肥前史談九二
貧家の少年松陰（松陰研究叢書一）	久保大来	伝記三四
佐賀に於ける吉田松陰	藤井真一	昭11
吉田松陰と三島中洲	吉田松陰の兵学	福本義亮
吉田松陰殉國詩歌集	吉田松陰書簡集（岩波文庫）	廣瀬豊編
吉田松陰（人物再検討叢書）	吉田松陰遺訓	関根悦郎
吉田松陰	吉田松陰先生の教育	小山一郎
吉田松陰論	吉田松陰詩稿詳解	広瀬豊
吉田松陰先生と維新の精神	吉富治一	大野慎
註23、学的に松陰研究をとりあげ、まとめて発刊した最初の書物ということだが できよう。このあとにも改訂し再版されている。その第四編には 「教育思想と実際」として次の章をとる。その内容の一部を示すと次のよう なる。		
第一章 教育の意義と目的		
第二章 教育の主義主張（道徳教育至上主義、英才教育、個性尊重主義など）		
第三章 教育制度（松下村塾、家庭的学校論、兵学校論、女学校論など）		
筆者のもつ考え方によれば松陰の発言なり行動をまとめたということができる。		
第七章 教育方法（教授及学習法、教授方法、精神教育、訓育の方法など）	第五章 教育的精神（教育の自覚、教育の念願、教育的愛、教育三昧、至誠 と教育など）	Y H Y Y • H
第六章 門弟論	註44 五・六卷	Y
第八章 女子教育	註44 五・六卷	註43 留魂錄四一五〇三

註24、この一書はこの頃出版された教育論としては最もよくまとまつたものの一つである。その中で注目すべき章として次のものをあげることができる。

### 三、村塾経営の抱負 四、村塾経営の方針 八、読書講学（自学主義）

### 九、教師論 十、教授振 十一、訓練法

当時としては高く評価されたらしく昭和16年頃（出版後十年間に）十六版を数えていた。

註25、この号の主論文は「玖村敏雄、教育者としての吉田松陰」である。松陰を教育者とみて、本格的に取組んだものであるが、「忽忙の間の執筆で他日を期したい」とあるのは残念である。このあとに「玖村敏雄、松陰研究の文献について」の一編がついている。

註26、この臨時号には次の論文がのっている。「吉田松陰の國家観（玖村敏雄）」「吉田松陰の教育（安藤紀一）」「吉田松陰の女子教育論（山本三郎）」「教育者としての吉田松陰（山県丈夫）」その他二篇。昭和五、六年に廣瀬豊、玖村敏雄、後藤三郎らにより、松陰を教育者として考察する傾向がつよく出て来たということができる。

註27、松陰の教育研究序説とあって「時代と教育」「松下村塾の教育」の二項目だけで終っている。このあと「山口県教育」での継続した論文は見当らない。註28、昭和7年には本書以外にも、松陰の遺文が解説をつけて出版されている。昭和6年9月の満洲事変、昭和7年1月の上海事変、5月の五・一五事件、昭和8年2月教員赤化事件などがおき、世相の変化に対応して松陰の遺文が出版され始めていることは注目される。

註29、昭和5年の「吉田松陰の研究」につづくものである。

### 第一編 教育 第一章 明倫館時代の教育 第一章 松陰塾時代の教育

### 第三章 松下村塾時代の教育 第四章 松陰以後の松下村塾

### 第五章 松陰の読書法

右のように章数は多いが三八頁の内容である。第二編 哲学思想及その他、

第三編 松陰研究の諸問題、第四編 研究史料の探訪

註30、目次は次のようになっている。

### 第一編 吉田松陰 一、吉田松陰の生立ち 二、松下村塾に就て 三、周防

（布）政之助と当時の長州藩 四、品川弥二郎と吉田松陰 五、吉田松陰の思想の本流 六、シュープランガーラーを超えてゐる松陰 七、愛の教育の権化の松陰 八、青年の松陰 九、松陰と陽明学 一〇、高杉晋作と松陰 一一、松陰の熱腸 一二、井伊掃部頭直弼

第二編 ペスタロツチー、その五に「ペスタロツチーと吉田松陰」をあげている。

シユプランガーラーを超えているといつても、シユプランガーラーの「教育は文化の創造である」ととらえ、松陰はすでに「この教育作用の本質を掴んでいた」と士規七則の前文と第一則をあげているが、別に論証はない。また「五、ペスタロツチーと吉田松陰」では「一、序論 二、心境の相違 三、師の感化 四、良友の鼓舞 五、教学の理想の差異 六、俊秀雲の如き学徒 七、生地 八、父祖九、少年時代 一〇、結論」とし、その結論の中で「一人がかく万衆の喝仰をつなぐ所以のものは果して何であろうか。それは一に自己中心の城砦から脱出して天下の為めに献身的生活を展開せられたところにある」と。学問的に発見はないが、青年教師を励ますには好著と思う。

註31、大冊である。「松陰先生と其の師範」で約三〇〇頁を松陰が教えをうけた人々について述べ、「松下村塾の教育」は約一〇〇頁。さらに「松陰先生の個性教育」として約四〇〇頁を割き、門下生との教育関係を描いている。文献的解説で、当時としては高い評価を得たものと考えられる。このあと「松陰先生の女子教育」「松陰先生の経済教育」を論じている。しかし全体的には松陰の教育についての体系的研究というよりは、当時までの松陰研究の情報の集大成とでもいふものである。

註32、小冊子で文献的解説である。

註33、第一篇は「松陰先生の教育力」として「松陰先生と吉田栄太郎」「愛弟子入江杉藏」「村塾の功労者久保清太郎」「松門の柱石小田村伊之助」として四人との関係を伝記的にそのかかわり方をまとめている。「松陰の教育力」を分析して論じたものとはいえないであろう。栄太郎と杉藏は門下生だが、久保と小田村は友人である。教育だから見るのは我田引水のところが出る。第二篇は「松陰研究の諸問題」である。

註34、山口県教育会編の岩波書店版の松陰全集十巻が、これまでの松陰遺文を総括したものということができる。編纂発行の経過大要については(二〇巻末)にあるが、昭和七年松陰研究家安藤紀一、広瀬豊(海軍大佐)、玖村敏雄(広島高等師範学校教授)の三人が中心となり監修には徳富猪一郎、文学博士渡辺世祐の二人が委嘱せられた。三編集委員の下に構部幸雄、池上岩太郎、岡不可止の三人が筆写の事務の委嘱をうけた。資料の採訪は三人の編集委員が担当し、当時の予算として二千部の印刷に対して五万六千円の経費が計上された。途中いろいろの障害があったが、第一回の原稿が東京に送り出されたのは昭和九年三月十八日で、最初この議のもち上った昭和六年九月から数えて二年半のあとであった。完成までにはさらに二年を要した。

註35、当時の日本は「労作教育」の思想が導入され活潑になっていたことから、この観点で松下村塾の教育をみたものと考えられるが、私はこれを見ることはできなかつた。

註36、蘇峰の「吉田松陰」の改訂ごとに彼の序文があり、その頃の松陰觀を示しているので、今迄それを引用してきたが、昭和五年版の序文ではこの「吉田松陰」が清国に翻譯されたこと及び清国における伝記作家が蘇峰のそれを典型としていることを付記している。さらに昭和九年版の序文では次のように述べている。「若し日本精神の権化を上下古今の日本人中に求めば、予はその一人として本書の主人公——吉田松陰先生——を擧ぐるに遲疑しない。これは予一人の私言ではあるまい」と。

註37、日本教育史史料として雑誌教育に載つたものである。

#### 一、教育者の性格と生涯 二、明倫館時代の教育 三、野山獄時代の教育 四、松下村塾の教育 五、結び

右の五の結びの最後のところで、次のように述べている。偶像化した松陰から、一步客觀化し、その教育を述べているところに、これまでの松陰研究に見られない一面がある。

「世には松陰の門下から明治の六大臣(木戸、伊藤、山縣、品川、野村、山田)を始め前原一誠、松本鼎その他の顯官を出したことを以てその教育の効果と激称する人が少なくない。吾人と雖もそれに異存はないが、併しながらこれらの人々

は幕末に於て殉難しなかつたといふ幸運に恵まれた。この幸運を恵むことは松陰の教育力の範囲外にあることである。おどろくべきは維新前後の困難に殉じた人の極めて多いことである」と。

註38、吉田栄太郎との教育的関係を中心についている。先の註31の一書の一部とみてよい。

#### 註39、未見

註40、新書版の小冊子である。「前編 教育の理想と信念 第一章 序 第二章 教育の目的」として、教育目的は松下村塾記に示されている「人たる所以を学ぶにあり」をあげている。「後編 第一章 松下村塾以前 第二章 松下村塾第三章 教育の実施方針 第四章 教育的精神 第五章 訓育 第六章 教授法」とあって「結論として、一、日本人の教育 二、煩瑣な礼法規則を廃して教師の人格を以て指導すること 三、設備の不完全忍るるに足らず、特に校舎は小なるを可とす 四、総ては教師である 五、教師の修養 六、教育の為の教育」を「松陰先生の教育の特色と現代教育」としてあげている。

註41、これは表題と発行所名が変っているが、註30にあげた書物と内容は同じである。

註42、岩波版松陰全集第一巻の「吉田松陰伝」を訂正増補したもので、「筆者の意図であるところの人としての、教育者としての松陰の面影」(同著の序)を浮説にしたもので、これまでの偶像化した松陰像から、文献をもとにした科学的な伝記として名著といえるものである。

註43、編者は松陰の教育方法を具体的に示す文書をできるだけ多く収録したといい、次のものを収録している。

武教全書講録、松下村塾記、土規七則、村塾聯、村塾規則、幽室文稿抄、書簡集、留魂錄、村塾諸資料、丙辰日記、野山獄読書記、丁巳日乘、食事人名控

註44、一〇二頁の大きさで、従来の広瀬豊の所論と同じ。





吉田松陰  
吉田松陰遺墨帖 二冊  
吉田松陰遺墨帖  
吉田松陰の精神  
吉田松陰至誠の書  
吉田松陰の遊歴  
吉田松陰と読書  
吉田松陰と文学  
吉田松陰の教育理念  
吉田松陰と晉作  
吉田松陰  
京都帝国大学尊攘遺芳（三十九）  
松陰詩歌集  
松陰先生講孟余話解説  
下田における吉田松陰  
殉國の人吉田松陰（偕成社伝記文庫）  
吉田松陰殉國の精神  
神国魂・吉田松陰  
松下村塾の指導者  
人間吉田松陰  
吉田松陰遺文集（二巻二冊）  
吉田松陰選集  
吉田松陰大陸南進論  
吉田松陰と月性と黙霖  
吉田松陰の詩と文  
吉田松陰・至誠の書  
吉田松陰の思想と教育  
吉田松陰（新偉人伝全集）

和田政雄 松陰神社・玖村敏雄 玖村敏雄 竹内尉 陶山務 和田健爾 妻木忠太 岡不可止 田中常正 岡不可止 伊藤痴遊 武田勘治 龍口堯 広瀬豊 福本義亮 池田宣政 和田健爾 村崎毅 上田庄三郎 栗栖安一 武田勘治 福本義亮 和田健爾 布目惟信 玖村敏雄 河野通毅 和田健爾 玖村敏雄 山中峯太郎

岩波書店	鶴書房
天最堂	
健文社	
第一書房	
京文社	
泰山房	
讀書と文献	一
国文学解釈と鑑	
教育九九	
平凡社	
道統社	
日本評論社	
原理日本社	
武藏野書院	
偕成社	
京文社	
誠文堂新光社	
學習社	
文芸春秋社	
啟文社	
撰書堂	
読売新報社	
誠文堂新光社	
興教書院	
三光社	
京文社	
岩波書店	
潮文閣	

18

17

註 52 講壇 53 53 53 53 53

講孟余話 二二四五

松陰と鳥山確齋	上園一樹
松陰の罪の自覚について	岡不可止
平戸と松陰先生（長崎のことごとく）	小野実
吉田松陰の日本的性格	ハインリッヒ・デュ・リン
松陰神社物語	長崎叢談三
吉田松陰	歴史日本一一
吉田松陰	松陰精神普及会
松陰先生一代記紙芝居読本	金の星社
吉田松陰の女訓を語る	松陰精神普及会
勤王の神・吉田松陰	日本青年文化協会
吉田松陰と象山	日本青年教育会出版部
松陰と素行	第一出版協会
吉田松陰と塾の人々（新偉人全集三三一）	地人書館
吉田松陰（道義的志士の世界の内面的探求）	講談社
吉田松陰正史	第一公論社
吉田松陰・全日録	新興出版社
吉田松陰の思想	教材社
吉田松陰兵家訓	雄生閣
松陰主義の生活	春秋社松柏館
吉田松陰	松陰精神普及会本部
尊攘聚英（内、松陰画像及資料）	同上
時代の明星・吉田松陰	三学書房
吉田松陰	東洋文化研究会
続解説吉田松陰遺文集	武藤貞一
吉田松陰の对外思想	栗栖安一
講孟余話訳註	渡辺幾治郎
吉田松陰の武士道精神	佐藤堅司

上園一樹	伝記九三七四
岡不可止	改造二四一二
小野実	長崎叢談三
ハインリッヒ・デュ・リン	歴史日本一一
近藤留藏	松陰精神普及会
波澤青花	金の星社
近藤竜三	松陰精神普及会
清川秀敏	日本青年文化協会
廣瀬豊	日本青年教育会出版部
武田勘治	第一出版協会
竹内尉	地人書館
山中峯太郎	講談社
武藤貞一	第一公論社
雜賀博愛	新興出版社
藤井貞文	教材社
斋藤鹿三郎著・斋藤直幹編	雄生閣
狩野鏡太郎	春秋社松柏館
丸山義一	松陰精神普及会本部
丹潔	同上
近藤留藏	三学書房
中里介山	東洋文化研究会
東洋文化研究会	武藤貞一
武藤貞一	栗栖安一
武藤貞一	渡辺幾治郎
栗栖安一	佐藤堅司
廣瀬豊	世界週刊六六
廣瀬豊	講書堂
廣瀬豊	武蔵野書院
廣瀬豊	歴史日本二八

昭  
18 17 17 17 17 17 17

Y	Y	Y	H	Y	H	H		Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y
.	.	.		.	.			.	.																		
H				H	K			H																			

吉田松陰と日蓮宗	茂田井教享	法華 三〇一〇
松陰先生の思想的態度	室戸健造	中央公論 五四
特輯・吉田松陰	内藤世永	歴史日本 二八
吉田松陰と現代の教育	山口県国漢会編	芸文春秋 二月号
下田における吉田松陰史料	玖村敏雄	下田開国記念館 同上刊
松陰読本	栗栖安一	大阪新聞社 共立出版
吉田松陰遺文集	諸根樟一	
吉田松陰 東北遊歴と其亡命考察	近藤留藏	
生きている松陰	玖村敏雄	
吉田松陰の精神	柿村峻編	
吉田松陰・留魂録	下程勇吉	
吉田松陰の学的態度	広瀬豊	
松下村塾の教育		
吉田松陰・人間松陰		
第三章 青年教師松陰 一、教材としての松陰 二、人間松陰		
三、松陰の教育觀 一(教育者の性格(至誠・好読書・自己宣伝性))		
(二)教育精神(至誠) (三)教育方法(自己教育・切磋・規則の不適用)		
四、青年教師松陰 五、新しき師道の建設		
右の項目によつて松陰を解説している。相当に客観視して説いている。		
註45、第一 chapter 新日本の指導精神 第二 chapter 教育的評伝	第二十四 父母	
高等小学修身書卷三 第二 国家		
高等小学修身書女子用卷一 第六課 兄弟姉妹		
高等小学女子用卷四 第六 伊藤博文		
高等小学三年用 下 第四 乃木大将		
高等小学国史下卷 第四十八 攘夷と開港		
尋常小学国史下卷 第四十九 大政奉還		
高等小学国史下卷 第四十四 大政奉還		
小学国史教師用書下卷(一) 第二十八 外交の紛糾・洋学の研究		
註46、松陰の「教育説選集」と副題して次の原文を仮名書にして提示している。武教全書講録、松下村塾記、土規七則、村塾の聯、村塾規則、松下村塾諸資料(丙辰日記、野山獄読書記、丁巳日乗、松下村塾食事人名控)、幽室文稿抄、附雜篇、書簡集、留魂録、附錄松下村塾挿話		
註47、未見		
註48、富永省吾は昭和十四年現在で松陰に関する事項を内容とするものをここにまとめている。この頃の松陰の取扱い方を見るのによい。その一部を示すと次のようにある。		
尋常小学修身書(教師用) 卷五、第二十二 忠君愛國、第二十三 兄弟		
註49、未見		
註50、未見		
註51、未見		
註52、未見		
註53、未見		
註54、未見		
註55、未見		
註56、未見		
註57、未見		
註58、未見	留魂録 四一五三	註57
註59、未見		

岡田耕作の教育——「或時、十才ばかりの幼い弟子が新年に来てものを問うたのを喜び群童に魁くるは天下に魁くる始であると言つて親切に教へ励ました。」（修五 169）

「又霜の深い夜爐を囲んで弟子たちと国事を語り明かしたことがありました。」（修五 169）

「後弟子たちと寝起きや食事を共にして書物を読み意見を斗はせ、熱心に教へ導きました」（修五 170）

増築——「後には塾生が次第に増加し、八畳の一室では狭くなりましたが、皆相談の上一室建増することになり、先生と弟子とが力を合はせて柱を立て、壁を塗って十畳半の一室を作りました。先生が長い竿の先に壁土を載せて高々と差上げると梯子の上の弟子がそれを受取りそこねて、あつと思つたとたんに先生の目の上に其の泥が落ちたこともありました。」（修五 169 170）

「三月更に一室を増築した」（修五 174） 増築の成った村塾の写真（修五 110）

上書天覽——「意見書の一つは孝明天皇の乙夜の覽に入ることを得、且つ天皇が一方ならず此の國難を宸憂あそばされる趣を洩れ承つて松陰は皇恩の忝さに感泣しました」（修五 168）

村塾の教育——安政五年六月二十八日在江戸の久坂宛書簡の後の方を原文のま

ま（史教 389）

「毎日稽古の間には弟子たちと一緒に畠を耕したり米を春いたりしました」

（修五 169） 米春台の写真（史教 387）

家学教授許可——「七月に至り家学を教授するの藩許を得、益々国体を闡明し、時局を痛論し門人の志氣を策励するに力めた」（修五 174）

神国の大幹——「松本村は片田舎ではあるが此の塾からきっと御国の柱となるやうな忠義な人が出ると言つて疑ひませんでした」（修五 170）

「松下村塾の門弟をして誓つて『神国の大幹』たらんことを志すに至らしめた」（師修一 67 68）「留題村塾壁」の全文原文のまま（修五 175 176）

再び野山獄に入獄——「安政五年いはゆる戊午の大獄起り志士の難に遭ふ者が多く、松陰もこの年の暮藩獄に厳囚せられた」（女高修二 30）

註49、玖村の「吉田松陰の思想と教育」（昭 17）に収められている。

註50、講演の摘要である。時局的松陰の教育は「先生の尊皇攘論を明らかにしないでは理解しえられない」との立場で論じている。

註51、この同じ番号の六冊を見てわかるように昭和 15、16 年頃には浪曲、大衆読本、人傑、教育の神、不滅の人、人間鍊成などと時局的にとらえられている。当時の右翼の巨頭頭山満が「改造」に松陰を語っていることなど、それをよく物語るものであって、松陰の教育を客観的に分析するなどのことは考えられていないかった。

註52、雑誌「教育」に書いている岡不可止もまた時局的であった一例ともいえる。岡はその一、二で松陰の生立ちと当時の時局をのべ、その三で、当時の藩学明倫館の学頭も、「幕府の主持する官学儒教によつて歪曲せられた国体思想をそのまま遵奉した結果である」として「太華のこの民主主義的な考を痛烈に攻撃」したととらえ、当時の日本には「教授はあつたが教育はなかつた」と説き、松陰こそが「新国民教育の原理を確立した」のだと論じている。

註53、同じ番号の三冊を見ても「殉國の人」「殉國の精神」「神國魂」と松陰の肩書がつけられるようになつた。昭 13（16 冊）昭 14（19 冊）昭 15（16 冊）昭 16（20 冊）昭 17（22 冊）と松陰関係の書物が次第にふえていった。いかにも松陰が利用されている感がある。

註54、「第一部成長遍歴時代 第二部指導者時代 第一章獄裡の反省 第二章道の探求 第三章指導理念の樹立（一）第四章同（二）第五章松下村塾 第六章実践運動 第七章孤忠 第八章同志愛 第九章留魂」そしてそのあとがきに岡は「叙上の如く私は松陰先生をもっぱら學問的見地からのみ解剖することは意識的に避けた。松陰はいわゆる学者ではなかつたからである」と。

註55、この書の凡例を書いたのは昭和十六年九月で、實際の発行は昭和十七年二月である。この間に日米戦争が始つた。この開戦とそれにつづく敗戦を予想したわけではなかろうが、その序文に「かの普佛戦争に於て城下の盟をしたドイツはフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』という大講演に示唆せられ、教育改革を中心とする国策を遂行して終によくフランスに復讐し得たことは西洋教育史上の偉觀であ」（序に代へて）るという立場と「唯眞の人間を造ろうとして千辛万苦した結果が甚だ成功した。（中略）幾人かの不良性を帯びた青年を平凡な良民にした

ことも、大臣級の人物を輩出したことと共に、松陰の教育における成功である」との立場から、

- 二、学問の態度 三、国体思想の転回 四、国体と臣民の道  
五、文武両道の思想 六、経世時務論 七、教育の使命と新学校  
八、教育者の性格 九、敬愛の教育 十、気魄の教育

- 十一、個性の教育 十二、死の教育

と項をあげて論じている。これまで雑誌などで論じてきたところを総括した所と新しく執筆したところがあるが、「四、国体と臣民の道」、六の中の「二、東亜新秩序」などは、時代的色彩で松陰を解釈したという面で残念であった。あくまで筆者の専門である教育学、教育史の立場から「松陰の教育」に終始してほしかった。

註56、松陰の思想を「勤皇・教育・経國・友愛・人生」とにわけ教育の章では、未焚稿（学を論ず）西遊日記（嘉3・9・28）書簡兄梅太郎への安元・11・22以降のものに解説を附している。著者は思想的伝記であるといっている。

註57、前註の玖村敏雄が現代すなはち日米戦争の真最中の教育を「松陰は何を現代に示唆し活力を与へつつあるであろうか」といふ問題に就て私はここで少しく書かう」とい、「教育の目的は個人の幸福利益を獲得する手段を与へるにあるとか、文化の継承、創造にあるとかいふ考へ方が歐米のみならずわが国にもあるが、松陰は国民の心を正して個人の存在意義を国体の自覚から了得させ、『子としては孝に死し臣としては忠に死し仰いでは皇國の大恩に報じ俯しては一身の職分を尽さん』といふ覺悟を与へ、且つその覺悟を実にするに足るやうに才能を陶冶鍊成するのが教育の目的であるとした」（同註三三頁）私の研究からいえば

書名（所収）	編著者名	出版社・登載誌	出版年	所在	全集・註
吉田松陰（岩波新書） 教育者としての吉田松陰の一面 自立心交の教育吉田松陰の教育 幕末の志士はいかにして世界の知識にめざめたか、吉田松陰の場合	奈良本辰也 下程勇吉 豊田堯	岩波書店 思想三六 哲学研究三五 西洋史学一五三年特別号	昭27 昭26 昭26	Y Y H	註62 註61 註60

註58、未見  
註59、この年大戦は終了している。これまでの研究文献とこれから戦後に出る研究文献を一覧表にまとめるに非常に興味深い。戦後においても、ある年に急増している。その理由を考えるもの意義があるであろう。

年代	冊数	年代	冊数	年代	冊数
昭32～33	0	昭和3	7	明治10年まで	7
昭和34	15	4	7	明20～29	18
35	2	5	5	明30～38	14
36	0	6	10	明治	2
37	1	7	16	元	6
38	2	8	8	2	2
39	3	9	14	3	4
40	2	10	17	3	5
41	5	11	20	4	6
42	0	12	8	4	3
43	3	13	16	3	3
44	1	14	19	1	4
45	2	15	16	2	3
46	3	16	20	2	2
47	2	17	22	0	1
48	5	18	25	1	1
49	5	19	8	1	1
50	5	20		1	1
51	3	昭21～25		11	13
52	8	昭和26		13	14
53	0	27		2	6
54	3	28		2	4
55	3	29		6	6
56	0	30		1	1
57	1	31		2	1
		昭和			

吉田松陰（アテネ新書）	下程勇吉
吉田松陰の研究の一節	同上
吉田松陰の愛國教育	福本義亮
吉田先生とその教育	萩明倫小学校
松陰余芳	山口県教育会編
松陰先生と山県太華	西川平吉
松陰先生と蘭学	田中助一
殉難百年記念 吉田松陰の遺跡と遺墨	山口県地方史学会萩支部編
松陰先生を語る	同右所収
松陰と下関	同上刊
松下村塾の人々（日本人物史大系五）	奈良本辰也・杉浦玲
新日本の光 吉田松陰	田中俊資
吉田松陰	岡不可止
吉田松陰（講座現代倫理一一）	鹿野政直
松陰読本	萩明倫小学校編
安政年間における明治政権への二つの道	山口県地方史学会萩支部編
吉田松陰と横井小楠の思想展開	同上刊
開国と吉田松陰の立場	朝倉書房
吉田松陰の教育理想とその宗教的信念	角川書店
留魂錄	筑摩書房
吉田松陰の地理学観	山口県教育委員会
吉田松陰	九州史学
明治維新の再評価七 吉田松陰	四 岩根保重
日本の思想家一	岩本芳雄
吉田松陰と「夢の代」	小崎英達
吉田松陰・明治維新の人間教育	玖村敏雄
幕末尊攘派の倫理觀 吉田松陰の場合	福本椿水編
松陰余話	河上徹太郎
吉田松陰	萩商工高校編
明治維新の再評価七 吉田松陰	中央公論
日本の思想家一	山口県地方史研究
吉田松陰と「夢の代」	同上
吉田松陰・明治維新の人間教育	朝日新聞社
幕末尊攘派の倫理觀 吉田松陰の場合	四 山口県地方史研究
松陰余話	九 弘文堂
吉田松陰先生百年祭誌	九 福本椿水編

昭 昭

Y	Y	K	K	Y	Y	K	Y	Y	H	H	H	H	H	Y	Y
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

註 68	註 67	註 66	註 65	註 64	註 63
留魂錄					
四 呂九					

吉田松陰・理想に生きた生涯	河上徹太郎	奈良本辰也
吉田松陰の学道論	小野重行	文学界 三〇五七八、二〇、二
幕末明治初期の中学校科学技術教育思想の一考	永江新三	東洋文化 三
吉田松陰の作場は学校論から職工学校へ	道家達将	科学史集刊 三
安政の大獄・井伊直弼と吉田松陰	村岡繁編著	日本教文社
松陰吉田寅次郎伝	池田論	萩遺墨展示館
松下村塾 近代日本を創った教育	村岡繁	広済堂出版
吉田松陰百首選	村岡繁	萩遺墨展示館
吉田松陰と僧黙霖	河上徹太郎	文芸春秋社
吉田松陰	木俣秋水	萩遺墨展示館
外史吉田松陰	武田八洲満	萩遺墨展示館
吉田松陰 その人と生涯	奈良本辰也	萩遺墨展示館
吉田松陰（批評日本史 6）	奈良本辰也	萩遺墨展示館
吉田松陰を語る	村岡繁	白川書院
吉田松陰	橋川文三・杉浦明平	思索社
吉田松陰論	村上一郎	思索社
吉田松陰の手紙	佐藤薰	萩遺墨展示館
吉田松陰 その人と教育	河上徹太郎	大和書房
革命家吉田松陰	西山徳	第一法規
吉田松陰東北遊日記	寺尾五郎	潮出版
講孟余話	奈良本辰也	皇學館大学出版部
吉田松陰を語る	司馬遼太郎・橋川文三	講談社
松陰 その叛逆の系譜	栗原隆一	大和書房
吉田松陰（歴史小説シリーズ）	遠藤鎮雄訳	新人物往来社
吉田松陰とその門下	山岡荘八	芳山印刷
国木田独歩と吉田松陰	古川薰	学習研究社
吉田松陰入門	桑原伸一	新人物往来社
	山口県教育会編	山口白藤書店
	大和書房	

Y H H H Y Y Y H H Y H H Y H H H Y Y H Y

註  
73

東北遊日記

註 註  
70 69

吉田松陰留魂錄 象山と松陰 吉田松陰の墓と神社 吉田松陰（人物日本の歴史18 開国と攘夷） 異人の見た吉田松陰 吉田松陰－物語と史蹟をたづねて－ 天に羽ばたけ 草莽吉田松陰 吉田松陰 維新を先駆した吟遊詩人 適塾と松下村塾 花の吉田松陰 吉田松陰 吉田松陰 吉田松陰（維新の志士 日本史人物像十） 吉田松陰と松下村塾（季刊教育のために77—3） 吉田松陰（幕末の精神－無私のこころ） 吉田松陰（日本思想大系） 吉田松陰（江戸の思想家たち 下） 吉田松陰（日本の思想家 上） 吉田松陰をめぐる女性たち 松陰の精神史的意味に関する一考察 吉田松陰の体育論	岡崎功 信夫清三郎 田中助一 島幸子訳 奈良本辰也 村岡繁 寺尾五郎 古川薰 奈良本辰也・高野澄 共著 八切止夫 古川薰 山田克郎 河上徹太郎 片岡啓治 吉田常吉・藤田省三 西田太一郎 橋川文三 奈良本辰也 木俣秋水 藤田省三 村上繁 研究社出版 日本評論社 日本評論社 朝日新聞社 大和書房 平凡社 東海大学紀要（沼津教養） 昭57 昭57 昭55 昭55 昭54 昭54 昭52 昭51 昭51 昭50 昭50 昭50 H H H H H Y H Y Y H H Y 註74 註75 註76	新人物往来社 河出書房新社 小学館 条例出版社 成美堂 萩白鳥庵史莊 徳間書店 創元社 祥伝社 日本シェル出版 鶴書房 筑摩書房 日本評論社 日本評論社 朝日新聞社 大和書房 平凡社 東海大学紀要（沼津教養） 昭57 昭57 昭55 昭55 昭54 昭54 昭52 昭51 昭51 昭50 昭50 昭50 留魂錄 四四九
註60、戦後始めて出した吉田松陰伝である。吉田松陰は大戦中若者を戦争に驅り立てるため利用され、彼の言葉がいろいろに利用されてから、戦後の雰囲気の中で、これを書くということは、内容がどのようにあれ、勇気のいることであつた。作者は松陰を変換期に生きた歴史的人物、革命家ととらえてそれを書いている。	註61、雑誌思想に松陰の個性教育を哲学的に解明しようとしている。冒頭にい	
う。「今日に於いて我々が松陰をとりあげるとき、我々の立場は偶像崇拜的であつてはならず、また偶像破壊的興味に終始することであつてもならぬ筈である」とし、「松陰は教育者として年少者の特性・美質に対しても極めて鋭き感覚をもち、それを“深く愛し”たえず刺戟し、その志を励ましたのであった。各個人の個性		

を把握しその志を開拓するため「至誠を傾けたところに教育者吉田松陰の秘密がある」といっている。さらに「教育もまた己の真骨頭に徹して自他一如の徳に天の深みを体得する清明大和の道なのである。己の真骨頭に徹して自立するは己を貫いて一なる徳に帰するが故であり、自他を貫いて一なる徳に徹するは己の真骨頭に徹して己を超えるが故である」と哲学的解説をしている。

註62、右の註の立場から更に下程勇吉は進んで「自立心交」という彼自身の哲学的立場から松陰の教育を解説している。前者と共に当時としてはやはり勇気ある著作といえよう。

註63、昭和8年の「殉国教育」というのを「愛国教育」に変えたもので、内容も部分的に変更もあるが、大要は變っていない。

註64、パンフレット三二頁。「愛国心の教育」「孝道の教育」「個性教育」「意志の教育」「勤労の教育」「気魄の教育」などの項目で松陰の教育を解説している。地元とはいながら公立小学校でこの一冊を刊行したことは勇気のあることと敬服せざるを得ない。

註65、昭和34年は安政六年の松陰刑死から数えて百年目に當る。

註66、一、吉田松陰の最後 二、久坂玄瑞 三、高杉晋作 四、吉田穂麿・入江九一・久坂の死 五、井上聞多と伊藤俊輔 六、赤根武人・山縣狂介・高杉晋作 七、桂小五郎・佐世八十郎 八、勝利 これらが目次である。これらはいづれも人物史であって、松陰との教育的かかわりを解説したものではない。

註67、松陰の遺文中有名なものを書下しにして簡単な解説をつけ、小学校や中学校で副読本として利用できるようにしたもの。戦後の日本の雰囲気の中で小学校や中学校で使用できるのも、地元の故であらうが、戦後に松陰がまた復活してきたものともいえる。

註68、「國体意識と神道的信念を基調とした國家本位の教育觀」と松陰の教育理想を規定し、そのよつて來たる所を考究するとして 一、山鹿素行の思想的影響 二、松陰の讀書 三、水戸に行ってその学風のつよい影響をあげて論じていふ。

註69、松陰について最もよくまとまつた関係文献目録の「日本人物文献目録」はこの年で終つてゐる。

註70、戦後の出版物の中で松陰の教育についてもつともよくまとめられている。一般社会人への普及書として良い書物と思う。學問的に分析したというよりも、今迄の諸書による著者の次のような立場からのまとめと見てよい。「はしがき」にいう。

「松陰の教育はその子供とともに悩み苦しみ模索する教育となり、人間存在の教育となつたのである。(中略) それ故にまた近代日本を生み出す原動力となつた人々を数多く育てあげることも出来たのである。しかし松陰の教育の偉大さはそこにあるのではない。むしろ松陰の接した塾生の一人一人にもつともっと充実した人生、意味のある人生のことを知らせ、そういう人生を實際に戦いとらせたということにある。」

註71、未見

註72・73、革命家・叛逆という形容詞で松陰を表現したのは明治期の蘇峰と昭和大戦後の奈良本氏について三人目ということができる。戦前戦中の修養訓、道話の中の松陰、修身の中の松陰からみれば、全く想像のできなかつたことであろう。時代的変化をつよく感ずる。

註74、「吉田松陰と松下村塾」と表題し、「無私のこころ」をテーマにして書いている。この中で著者は次の三つのことをのべているが、よくとらえていると思う。

「松陰を教育者といいきことにあるためらいを感じる(中略)(松陰は)自己の思うところ、自分の生きようとする道筋を生きる道すがら人に伝えようとするそのことにおいて、人々に教育的作用がおよばされたというにすぎない」

「松陰における教育とはおそらくその方法にでもなく、説くところの思想にでもなく、その無垢なる人格から発する淨化の力にこそ根本の意味があった。」

「たしかに松陰の信じた皇国史觀はすでに亡び、松陰の恐れた日本存亡の危機は遠い過去となつたかのようである。にもかかわらず、松陰はいまなお亡びようとはせず、その姿は百余年をへたいまなお、なにごとかを語りかけてくるかのようである。それは松陰のしめた絶対的無私の姿、それが人間のもつ優れた資質であることを、いまの人々の心にも訴えてくるからではないか」

註75、「近世における武芸や狩獵については、それが意図的合目的に行なわれ

明治時代							
	昭和二十年まで	昭和二十一年以後	内 訳				
			11 82	42 240	2 46	4 36	
大正時代							
	昭和二十年まで	昭和二十一年以後	昭和 50 年代	40 年代	30 年代	20 年代	
			3 23	3 28	3 25	2 6	

る限り、すべて体育運動」とみる今村嘉雄氏の説を前提にして、松陰が兵学的立場でいうところの武を「体育」と考えて、松陰を「まさに日本における学校体育の先駆者」だと論じている。また「氣を養ふは名山大川を跋渉するにあり」という松陰の言からレクリエーションそのものへの示唆だといつては、いささか我田引水の論と考えられる。

註76、先に註59でまとめたところを加えて関係年の出版数を分母に、教育関係の著作数を分子においてみると次表の通りである。やはり松陰の教育について研究した書物は少いということができる。